

御土居の新知見 —御土居の堀は障子堀だった?!—

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 松吉祐希

1. 御土居とは

豊臣秀吉の京都の都市改造事業の一つに、御土居の築造があります。御土居は、京都の街を囲む土塁と堀で、小田原の北条氏を降し、天下統一を果たした翌年の天正 19 年(1591)に築造されました。おおよそ北は鷹峯から南は東寺まで、東は鴨川から西は紙屋川までの範囲を囲み、全長 22.5 km に及びますが、当時の史料にはなんと約 3～4 か月という異例の期間で築造されたと記されています。江戸時代になると、徐々に堀は埋め立てられ、土塁も一部が削平されていきました。現在、御土居は市内 9 か所が国の史跡に指定されており、その他に大宮交通公園や北野中学校に土塁が残存しています(図 1)。

近年御土居の発掘調査例が増えており、様々なことがわかってきました。今回の講座では、これまでの発掘調査で見えてきた御土居の基本構造や、JR 丹波口駅周辺の発掘調査で確認した堀の構造の新知見を紹介します。

2. 御土居の基本構造

御土居の調査はこれまでに 30 箇所以上になります(図 2)。

御土居の基本構造は、土塁・犬走・堀です(図 3)。規模は、土塁の基底部で幅 17～20m(調査 1、3、4、20、22)、高さ 4.75m(調査 1)、犬走幅 1.3～4 m(調査 1、18、25、30)、堀幅 12.5～20m(調査 1、3、4、13)、深さ 1.5～4 m(調査 1～4、8、13、28、30、33)。この基本構造の例外として、堀がない場所も想定でき、川を堀としていたとみられる部分もあります。

3. 堀の構造と障子堀

1) 御土居堀の畝状高まり

堀の底面は、2 種類の形状が確認されています。

調査 1、8 次、18、21、31 や現存する史跡でみられる堀の断面形は、U 字形をしています。この形状は、御土居全域にみられることから、堀の断面形の基本形と考えられます。

一方で、JR 丹波口駅周辺の調査 3、



図 1 史跡 鷹峯御土居

13、28、30、33 の堀の底面には、南北・東西方向にのびる畝状高まりが存在します。

調査30

丹波口駅西に位置する2021年度の調査地では、御土居の土塁の基底部、犬走、堀を検出しました(図 7～9)。

検出した土塁は東西幅1.2m分、長さ南北3.8m、残存高0.8mで、基底部は基盤層を掘り残して形成されています。犬走は東西幅1.3m、長さ南北4 mを確認しており、基盤層を削って上面を平坦に整形しています。堀は東肩約8 m分、長さ南北約33mを確認しました。堀の深さは最深部で1.6mでした。堀の肩部から底面にかけて、基盤層を掘り残して形成された東西方向を基本として南北方向の一部を含む畝状高まりを検出しました。畝状高まりは基底幅1.5～2.2m、上面幅0.3～1.1mの台形の断面で、堀の底からの高さは0.4～0.8mでした。畝状高まりの間隔は、4～7.5mあります。

堀からは、漆器、箸、栓、下駄、将棋の駒など多量の木製品が出土しました。

調査33

丹波口駅南西に位置する2023年度の調査地では、御土居の堀を検出しました(図10～13)。

堀の西肩から中央部にかけての東西幅6 m分、長さ南北約77mを確認しました。堀の深さは最深部で1.8mでした。堀の底面には、南北・東西方向に基盤層を掘り残して形成された畝状高まりを検出しました。畝状高まりには、基底幅2.5～4.0m、上面幅1.5～2.4mで、堀の底からの高さ約1 mの大型の高まりと、基底幅0.8～2.1m、上面幅0.1～0.5mで、堀の底からの高さは0.2～0.5mの小型の高まりがあります。いずれも断面はかまぼこ形を呈しています。畝状高まりの間隔は1.9～8.0mと様々ですが、調査区北端は6.7～8.0mと間隔が広く、調査区南側では、3.3～4.2mと比較的均一に畝状高まりが並んでいました。

堀からは、漆器、箸、栓、人形、下駄など多量の木製品が出土しました。

→このような堀の特徴は、城郭の堀の掘削方法の一つである障子堀ととても類似する！

2) 障子堀とは？

○近世の軍学書である有澤武貞『兵法拔書 夫之抄私解』(1707年)や、津軽耕道『武教全書諸説詳論家伝秘抄』(1713 年)などによると、

堀障子・・・縦横に障子(障り)が立てられた堀で、障りになるものは柵の場合もありますが、基本的には堀の掘削時に畝が縦横に立つように掘られました。

堀障子の機能・・・畝による堀底の移動制限や畝により滞水した堀底に深泥が溜まることによる防御機能、堀の掘削時の湧水の調整機能、標高差のある地形に掘られた堀の底に滞水させるための保水機能などがあります。

また、堀の掘削時に土を運搬するための作業用通路としての機能や、畝を掘り残すことで、堀の掘削土量が減るという利点も挙げられます（八巻編2016）

○障子堀をもつ城

北条氏の本城である小田原城（神奈川県）、支城の山中城（静岡県）、河村城（神奈川県）、岩槻城（埼玉県）のほか、西日本では、豊臣期大坂城、高槻城（ともに大阪府）、小倉城（福岡県）などで確認されています。

4. まとめ

○JR 丹波口駅周辺の近年の調査で分かったこと

- ・御土居の土塁・犬走・堀を確認した
- ・堀の肩部から底面にかけて、畝状高まりを確認した
- ・丹波口駅周辺の堀は、北でやや西に振れた方位に復元できる

○御土居で障子堀を取り入れた意義とは？

- ・防御機能が想定できる
- ・調査3の東に、京の七口の一つ「丹波口」の存在が理由の一つか？

近年の JR 丹波口駅周辺の調査で、御土居の堀に障子堀を取り入れたことを確認できました。障子堀は防御機能が主な目的と考えられ、京の出入り口である丹波口との関連が想定できます。ごく短期間で築造されたにもかかわらず、場所によりその構造が異なっていた御土居の実態から御土居の造営に込められた秀吉のねらいをみることができます。

【引用文献】

八巻孝夫編『中世城郭研究 第30号』中世城郭研究会 2016 年



図2 御土居主要調査地点位置図

表1 御土居関係略年表

年号	西暦	事柄
天正10年	1582	6/2本能寺の変。6/13山崎の戦い
天正11年	1583	大坂城築城開始。
天正13年	1585	秀吉、関白となる。
天正14年	1586	聚楽第着工(天正15年完成)。
天正16年	1588	方広寺大仏殿着工。
天正18年	1590	後北条氏滅亡。秀吉天下統一なる。京都において天正地割実施。
天正19年	1591	御土居の築造、閏1月着工、4月にはほぼ完成。寺町を建設。
文禄元年	1592	文禄の役始まる。伏見城(指月)築城開始。
文禄4年	1595	豊臣秀次自害、聚楽第破却。
文禄5年	1596	7月京都・伏見で大地震、伏見城倒壊。木幡山に再建開始、10月本丸完成。
慶長2年	1597	慶長の役始まる。
慶長3年	1598	8/18秀吉、伏見城にて死去。
慶長5年	1600	関ヶ原の戦い。
慶長8年	1603	京都所司代を設置。
寛永18年	1641	花街・島原が成立。六条三筋町からの移転による。
寛文8年	1668	京都町奉行設置。
寛文9年	1669	御土居の管理、角倉家に委託される(寛政3年(1791)まで)。

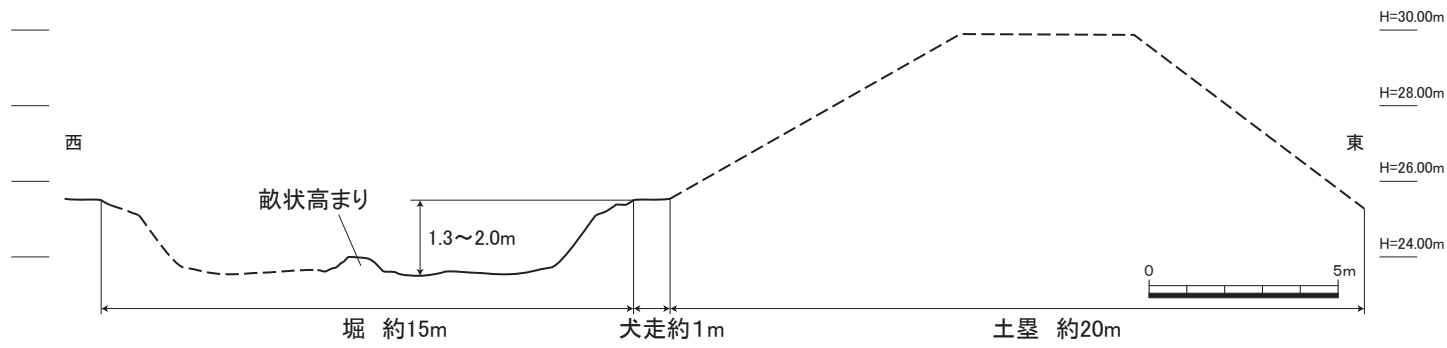


図3 JR丹波口駅周辺調査からの御土居復元模式図(1:200)

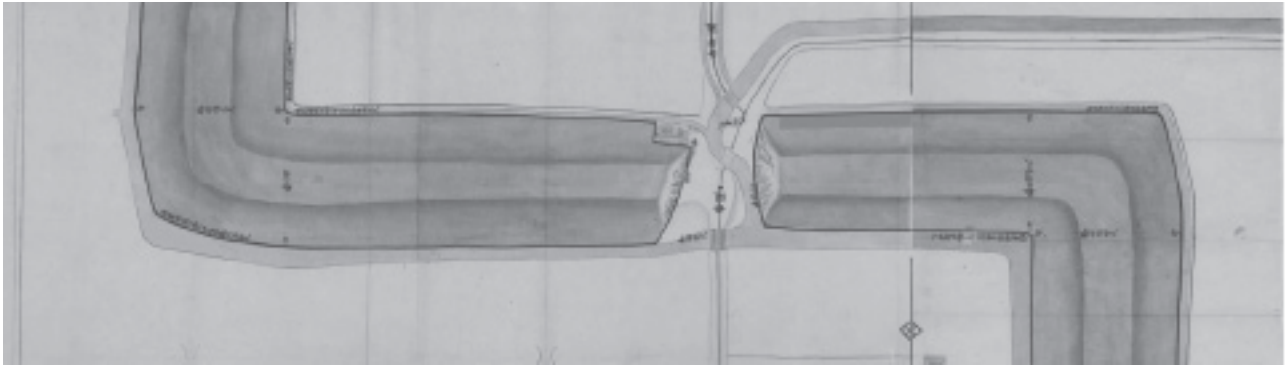


図4 丹波口周辺の御土居 『京都惣曲輪御土居絵図』(元禄15年(1702)作成、京都大学総合博物館所蔵)

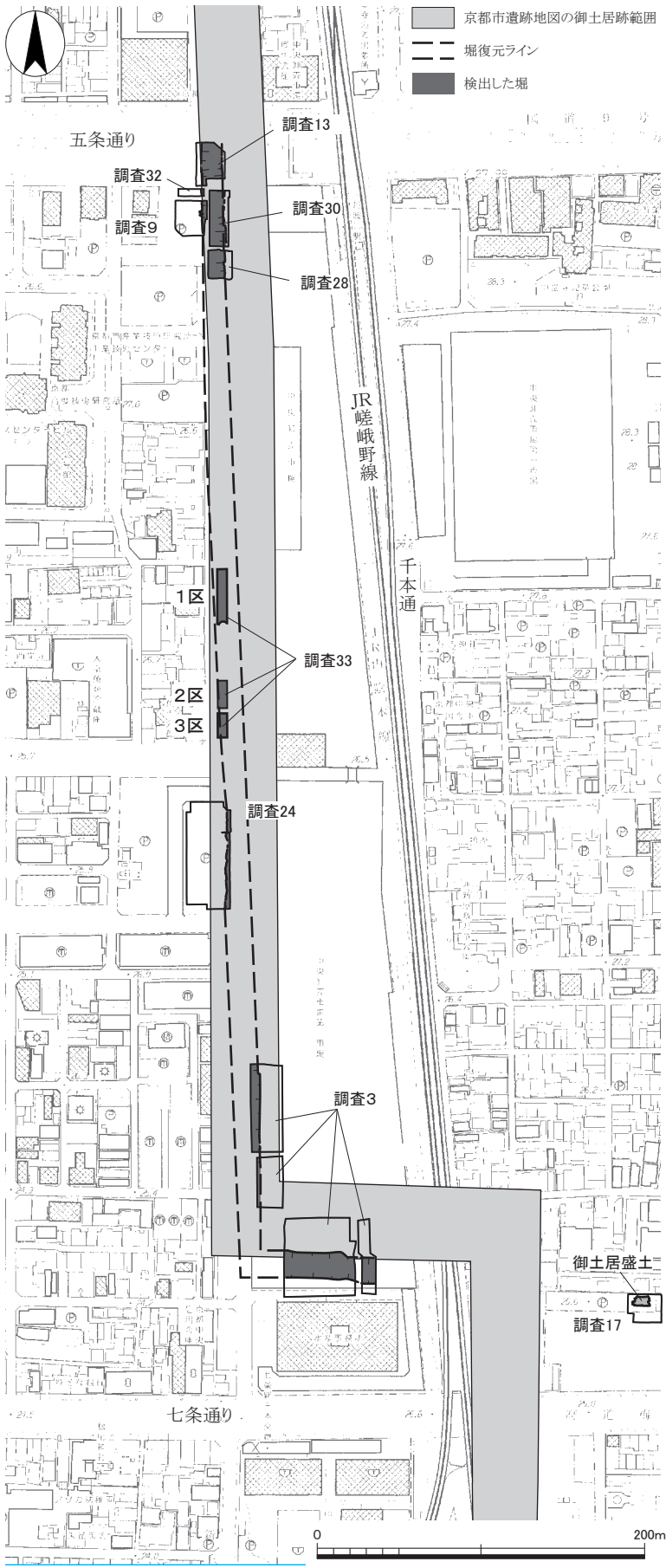


図5 JR丹波口駅周辺の御土居堀復元ライン(1:4,000)

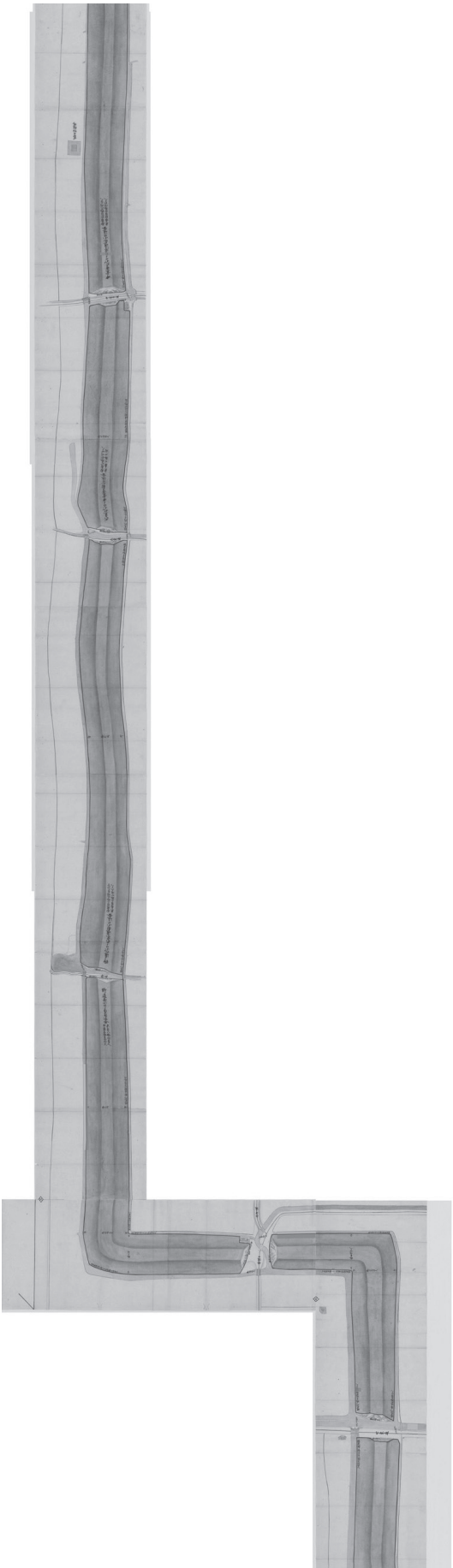


図6 JR丹波口駅周辺の『京都惣曲輪御土居絵図』(元禄15年(1702)作成、京都大学総合博物館所蔵)

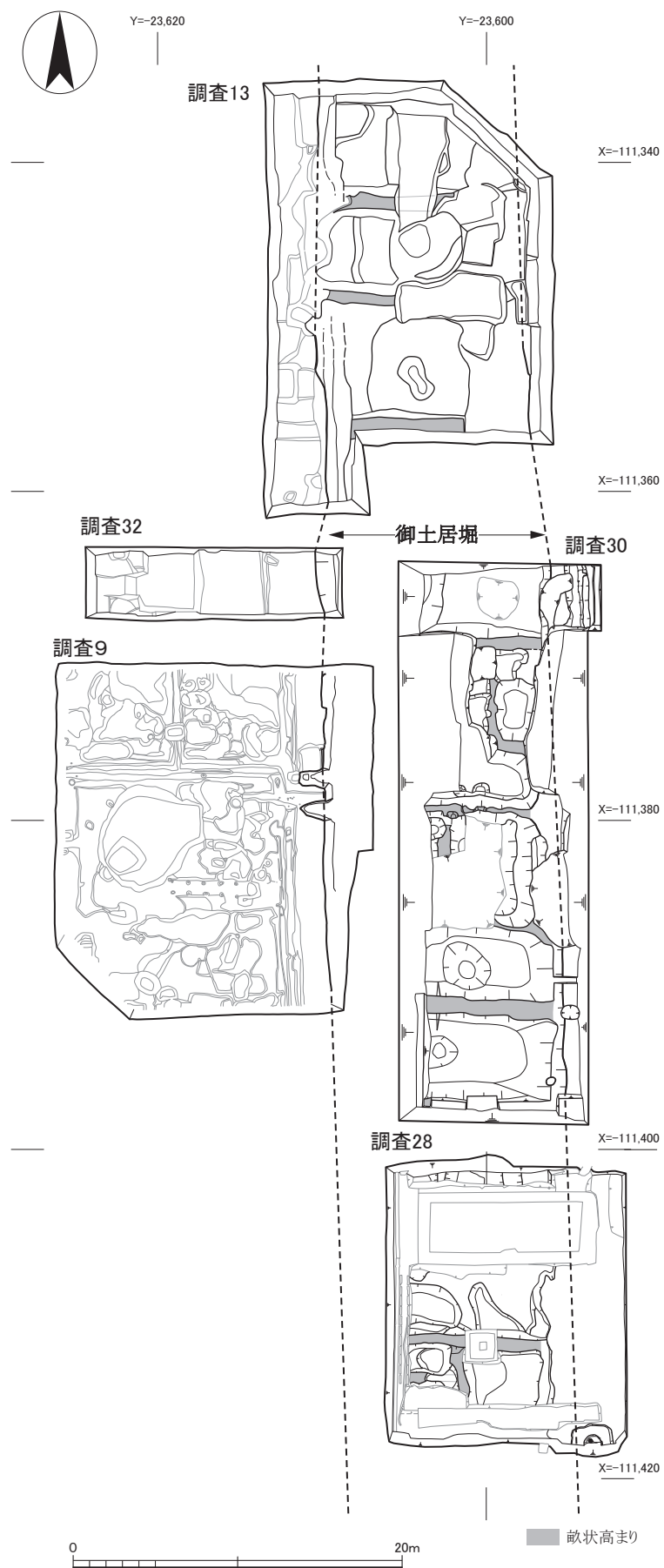


図7 調査30周辺における堀の畝状高まり(1:400)



図8 調査30 堀(北西から)



図9 調査30 堀の畝状高まり(北東から)

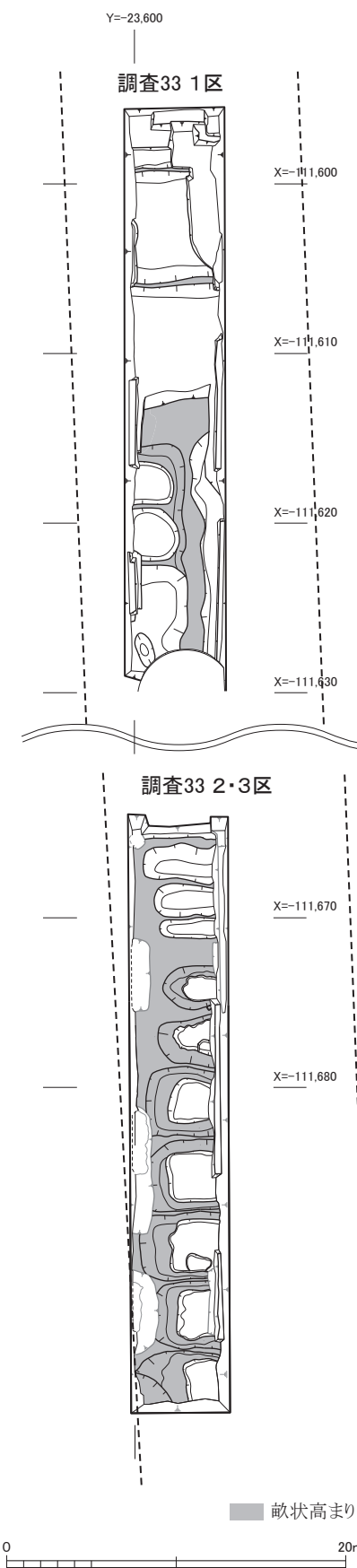


図10 調査33における堀の畝状高まり(1:400)



図11 調査33 1区堀(北東から)



図12 調査33 1区堀(北から)



図13 調査33 3区堀(北から)